

夕暮れが日に日に早くなり、少しずつ秋の気配も感じられるようになってきました。現在会員登録数 4,174 人さま。次号は 10 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■ -----■
【1】お知らせ

● イタリアの絵本作家フランチェスカ・サンナさんが来日されます
当財団では、国際講演会とワークショップを開催します。

参加申込受付中！ 会場：大阪府立中央図書館 多目的室

◇国際講演会「イタリアの絵本作家フランチェスカ・サンナ 自作を語る」

10月7日（土）13：30～16：00 定員 60 人、参加費 1000 円

通訳：松下宏子さん（関西大学ほか非常勤講師）

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#sannarec

◇ワークショップ「イタリアの絵本作家フランチェスカ・サンナさんと絵本をつくろう！」 ※通訳付き

10月8日（日）13：00～16：00 小学生対象、定員 30 人、参加費 500 円

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#sannaws

● 「第 154 回日本児童文学学会 関西例会」

ラウンドテーブル「日本における中国児童文学の翻訳」 他、研究発表

日 時：9 月 30 日（土）13：00～16：15

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 定員：60 人 参加費：無料

主 催：日本児童文学学会 関西例会 （IICLO 共催）

詳細・お申し込みは→ Peatix <https://jidobungakukr230825.peatix.com/>

● 講演会「中由美子と中国児童文学の世界」

中国児童文学翻訳者である中由美子さんのお仕事を振り返り、中国語圏児童文学の魅力について語り合います。

日 時：11 月 26 日（日）13：30～16：00

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 および オンライン

登壇：秦文君さん（作家、中日児童文学美術交流中心会長）他 ※通訳付き

定員：会場 60 人、オンライン（Zoom）100 人 参加費：1000 円

主 催：日中児童文学美術交流センター、中国児童文学研究会、IICLO

詳細・お申し込みは→ Peatix <https://nakayumikorec.peatix.com/>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム
■ ----- ■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『けものみちのにわ』 水尻紅美子/作 げみ/絵 B L出版 2023年9月
対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：小学5年生の風花は、おじいちゃん子。おじいちゃんは、「けものみち」がある林に近い家に一人で住んでいて、風花は、春休みの3月から次の年の2月まで何度もおじいちゃんの家を訪れて、けものみちから来たちいさい人に出会ったり、白と黒のまだらのカラスの化身のような少女に出会ったり、月の虹を見たりするなど、不思議な体験をする。また、靈感が強いと言っている朱里（じゅり）との友だち関係も描かれ、けものみちとかかわるおじいちゃんの子ども時代も明かされる。

Y：日常が描かれながら、不思議な世界の中で漂っているような感覚を抱きながら読んだ作品でした。これまでにない読後感でした。

T：日常と不思議な世界の境がすぐそこにあることがリアリティをもって描かれています。そのように感じられるための手づきが、とても周到だと思います。

たとえば、「七月 祈り石」の章では、主人公がおじいちゃんを除く家族と車でおそばを食べに行く。道路が混んでいて車が少し止まったために、お供えがいっぱいされているお地蔵さんに気づく。そしてお供え物の中に緑の石がはまった指輪があって気になる。このような自然な展開の中で、次の日、靈感があると自分で言っている朱里ちゃんが風花に、マスミちゃんから誕生日プレゼントとして緑の石の指輪をもらったことを告げ、「後ろをだれかが、ついてくるような感じがする」と言う。こんなふうに、日常にふっと不思議が入り込んでいくんです。

Y：一文が短くて、視点人物である風花（「わたし」）の気づきが重ねられた文章は、ちょっと詩を読んでいるような感じもしました。

T：文章は、あくまでも子どもの視点で貫かれています。たとえば、作品の中で「けものみち」と呼ばれている道をおじいちゃんが説明するとき、本来のけものみち、古道、廃道と比べながら説明していきます。そのことによ

て、この作品のけものみちが子ども読者にも確かにイメージできます。

Y：風花の夢とかかわった謎解きの要素もあって、最後まで読むと、それらが明かされて、ますます不思議に感じます。

T：子ども時代に、あるかかわりがあって、けものみちの近くに一人で住むことを決意するおじいちゃんも、そんなおじいちゃんといっしょに住まないという選択をしながらも、おじいちゃんのことを思っているおばあちゃん、現実世界をしっかりと生きているおかあさんなど、登場人物も個性的です。

Y：著者の水風さんは、「くじらすくい」という作品で「第35回 日産 童話と絵本のグランプリ」の童話大賞を受賞されました（『くじらすくい』たなかやすひろ/絵 BL出版 2019年12月）。

T：詩情のある文章に共通点を見ます。「くじらすくい」のような不思議が重ねられ、それによって、より深い物語になった。人はどこからきてどこへ帰っていくのかわからないという生と死というテーマが描かれた点に、「くじらすくい」からの充実・発展を感じます。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第97回「まなづるとダアリヤ」

教訓を拒む物語

〈くだものの畑の丘のいただき〉に、赤い大きな花をつけた1本のダアリヤと、2本の黄色いダアリヤが咲いていました。〈花の女王〉になりたい赤いダアリヤは、自分の光で〈そこらが赤く燃えるよう〉な輝きをもたらしたいと思っており、黄色のダアリヤはその美を褒めそやしますが、〈だってつまらないわ。誰もまだあたしを女王さまだとは云わないんだから〉と、赤いダアリヤは満たされない気持ちでいます。

黄色のダアリヤの賞賛だけでは満足できず、赤いダアリヤは星あかりの下をかけて行くまなづるにも繰り返し〈あたしずいぶんきれいでしょう〉と問いかけます。まなづるは、赤いダアリヤの美しさを認めてくれるものの、通り一遍の返事をするばかりで、むしろ向こうの沼の方のくらやみに〈つつましく白く咲いていた一本の白いダアリヤ〉に声をかけ続けます。

そのうち、黄色なダアリヤが〈何か恐そうに顔を見合わせ〉てしまいます。赤いダアリヤに〈黒いぶちぶち〉ができたのです。その翌日には、赤いダアリヤは〈ふらふらしたうすぐろいもの〉になり、〈顔の黄いろに尖ったせいの低い変な三角の帽子をかぶった人〉によって手折られてしまいます。赤いダアリヤはぐったりとなって連れ去られ、黄色のダアリヤが嘆き叫ぶなか、遠くからかすかに赤いダアリヤの声が聞こえるところで物語は終わります。

美を誇示する、自己顕示欲の強い赤いダアリヤと、我を出さず慎ましやかに咲く白いダアリヤ。両者の対比が際立ちます。題名は「まなづると…」であるように、まなづる（鳥）の存在も気になります。

しかし、みたび繰り返される赤いダアリヤとまなづるのやりとり（反復）のうち、最終日にはまなづるも白いダアリヤも描かれることはありません。作品は、美を強調し誇示する〈赤〉ダアリヤと、慎ましく無色の〈白〉ダアリヤを対照的な構図としながらも、最終的には両者の美醜や善悪、優劣といった教訓物語としての枠組みに収斂することを拒んでいるようです。

ダアリヤや菊の品評会・陳列会に、作者・賢治がたびたび参加していたことがこれまでに指摘されています。人為的に栽培され、観賞用として愛でられ（評価され）、人間によって連れ去られる運命の赤いダアリヤと、暗い沼地で忘れられたように咲く白いダアリヤ。自然の側ともいえる、まなづるの視線から見えてくる美の基準は明瞭ですが、結末を見る限り、作者は赤いダアリヤ、黄色なダアリヤを描いて物語を閉じています。そこに透けて見えるのは、紋（家系、血統、家柄、地位）という記号を印された者の行く末であり、またその宿命を負った者の姿なのかもしれません。（ペ吉）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション5 なめとこ山の熊』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 51

お父さんとお母さんは、「こまった、こまった」となげいていました。でも、心の中では、ぺちゃんこのスタンレーを、ちょっとばかり、じまんにも思っていたのです。

弟のアーサーは、スタンレーがうらやましくてたまりません。まねをして、ドアの下をくぐろうとしましたが、頭がドアにごつんとぶつかるばかりで、ちっともうまくいきませんでした。

（『ぺちゃんこスタンレー』 ジェフ・ブラウン/文 トミー・ウンゲラー/絵
さくまゆみこ/訳 あすなろ書房 1998年12月 p.10-13）

アメリカのニューヨークでマンションに住んでいるラムチョップさん一家のナンセンス物語です。ある朝、寝ているベッドに掲示板が倒れてきて、下敷きになったスタンレーは、厚さ1.3センチのぺちゃんこになってしまいます。最初はとまどっていたスタンレーは、ぺちゃんこを楽しみ始めます。鍵のかかった部屋を自由に出入りしたり、排水溝に落ちたお母さんの指輪を拾ったり、茶封筒に入ってカリフォルニアの友だちのところへ会いに行ったりします。

そんなお兄さんに嫉妬を抱くのが弟のアーサー。自分もぺちゃんこになろうとします。そして、凧になって空を飛んだスタンレーをほっぽり出して忘れてしまうなど、ひどいこともします。けれど、「ぺちゃんこでいることが、いやになっちゃった」というスタンレーの悩みを聞いて知恵を使ってスタンレーを元の姿に戻します。

「ぺちゃんこ」というあり得ないできごとを描きながら、ここには、兄弟関係のありようがいきいきと描かれています。年上のスタンレーが自分のできることに得意になりすぎて失敗し、真似ばかりしている弟が自分らしさを発揮するということは、兄弟間ではよくあることだと思えます。そして、「ぺちゃんこ」が読者に信じられるウンゲラーの絵が作品に魅力を添えています。（Y）

《4》行って来ました！

西宮市大谷記念美術館で10月9日まで開催されている「2023 イタリアポローニャ国際絵本原画展」に行ってきました。「ポローニャ・チルドレンズ・ブッ

クフェア」で毎年行われる絵本原画コンクールに入選した、日本人5人を含む27カ国・地域の79作家の作品が展示されています。5点1組の絵本原画で審査されますが、コロナ禍以降、オンライン応募となり、過去最多の91カ国・地域から4,345組もの応募があったそうです。

今回はあたたかい色あいの作品が多く選ばれているように感じました。また、マンガのような線で細かく描かれた作品も多かったように思いました。原画は基本的に5枚だけが展示されていますが、それだけでストーリーが想像できる作品がたくさんありました。

リトケイ・ユリアンナ（ハンガリー）の「のびて のびて」は、植えられたジャガイモの生長と地中や地上の生きものの様子が断面図のような絵で緻密に描かれていました。マルク・マジュスキ（フランス）の「チョウチョくん」は、男の子が蝶の羽をつけて飛ぼうとしているお話で、アクリルで描かれた緑の庭や花柄のカーテンの部屋がカラフルです。アレクサンドラ・ルンデ（ラトヴィア）の「もしも町でたったひとり、裸になったら？」の絵には、「ヌーディストビーチへ行こう」という絵が含まれており、自由に開放感があったいいなと思いました。ユリヤ・ツヴェリチナ（ウクライナ）の「戦争日記」はウクライナの現実が描かれていて考えさせられます。

また、特別展示のコーナーには、「「見る」を超えて－触って－「見る」ポロニャ展」というコーナーがあり、木製の触察パネルが紹介されていて、5作品の1場面が、凹凸や彫った線などで表現された絵を触ってみることができました。

いろいろな国の作家の絵を見ると、世界が広がるような気になりました。そして、デジタル技法と手描きや版画が巧みに融合している作品がますます増えているところが現代的で興味深いと思いました。（K）

西宮市大谷記念美術館 <http://otanimuseum.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第4回

第2章 前川康男先生と今西祐行先生
その1 『ヤン』

童話雑誌『びわの実学校』の校長は、雑誌を主宰されていた坪田譲治先生ですが、副校長は、創刊号からの編集長の前川康男先生（1921～2002年）でしょう。母宮川ひろがはじめて投稿した短編「たからもの」が第16号（1966年5月）に掲載されたあと、作品を見てくださるようになった今西祐行先生（1923～2004年）は、母の担任ということになります。私は、子どものころから、今西先生に、そして、前川先生にもお目にかかる機会がありました。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

連載第2回（第1章 坪田譲治先生 その2 『びわの実学校』）に、坪田先生の若いころのペンネーム、坪田城山はどう読むのかということを書きましたが、その後、「じょうざん」だったことがわかりました。坪田先生は、菅忠

道との対談（『坪田譲治童話全集』別巻『坪田譲治童話研究』岩崎書店 1971年所収）で、大学を出たころ、巖谷小波をたずねたことを語っています。

「（小波に一宮川注）「それで君の号は」と聞かれて、学校卒業してそれほど文学に熟達していないものだから、号、ペンネームなんてもっていないのです。ちょっと考えてみてもやっぱりペンネームみたいなものがあるようでないと信用にかかわると思って、譲治というのだから、城山（しろやま）と書いて「じょうざん」と読むことにして、城山（じょうざん）と申しますと言ったのです。そのころみんな号をもってましたからね。そしたら「ああそうか、城山（じょうざん）というのか」と。」（カッコ内はルビ）

坪田先生は、巖谷小波にたずねられて、とっさに、かつて名のっていた「城山」という号を思い出したのでしょう。

対談の相手の菅忠道先生（1909～79年）は、児童文化・児童文学の研究者です。

このことを注にくわえた、第2回の増補版をつくりましたから、データを更新します。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

【3】全国のイベント紹介

● 安野光雅展

会期：9月16日（土）～11月12日（日）

会場：あべのハルカス美術館

主催：あべのハルカス美術館、朝日新聞社、関西テレビ放送

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『けものみちのにわ』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/wTrFHBedaw4s3Bus9>

締切は10月10日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

コロナ禍で3年間の休止のあと、去年は思いもよらぬ台風のため中止となった「おはなしモノレール」。今年は9月18日に開催することができました。段取りを思い出しながらの開催でしたが、久しぶりに子どもたちの元気いっ

ぱいの笑顔に出会って、充実した一日を過ごすことができました。(T A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
